

浜口陽三・南桂子二人展「ひびきあう詩」

トークイベント

『ものがたりが聞こえる』

2008年5月17日

出演：皆川明(minä perhonenデザイナー)・松長絵菜(料理研究家)

5月の爽やかな風のそよぐ昼下がりに、ファッションブランド minä perhonen (ミナペルホネン)のデザイナーである皆川明さんと、料理研究家の松長絵菜さんをお招きしてトークショーを行いました。南桂子の作品の魅力や、ご自身の「つくること」に対する思いなど、お話していただきました。



左：松長さん 右：皆川さん

「見えているものを借りながら見えていないものを描く」



「2羽の鳥と落ち葉」 1954年 カラーエッチング

[皆川]

「2羽の鳥と落ち葉」は、違う方向を向き合っているんだけど寄り添っていて、自分の世界の中にいるんだけどまったく独りじゃない、なんとなく“孤独だけど安心”みたいな、合わさった空気感が好きです。

南さんの作品は、空間とか、絵として見えないところの空気みたいな所がとっても豊かだなと感じます。自分も鳥や花を描く時には、鳥がどんな風に飛んでいると洋服の持っている世界観が広がっていくかなとか、どんな花が咲いていたら周りの世界の柔らかさがでるかとか、「見えているものを借りながら見えていないものを描く」みたいなところがあります。

自分を表現する場所がそれぞれ違うだけで、

もしかしたら根っここの部分にあるものは同じだったりするのかな

[松長]

「春」は、本当にタイトルどおり“春”を思わせる、とても優しく、幸せがいっぱいこの作品の中から伝わってくる1枚だと思っています。太陽の優しい光をこの絵から感じる事が出来て、見ていると凄く幸せな気持ちになります。

[皆川]

洋服も着る人の気持ちが1番大事で、形としての完成ってということよりも、着る人がそれぞれに「いいな」って思ってもらうところが作る人のやりがいの部分だと思うんです。きっとお料理もいっしょで、食べる人の受け取る感情が1番大事なところ。南さんの絵とか、松長さんの料理とか、「つくること」が自分のなかでも大事だし、外に出していくときにも、その関わる人にもいいものとして受け取ってもらえたらという感情が伝わってきます。

[松長]

皆川さんや南さんや私だけではなくて、心の中で感じる部分とか、思っていることはみんな同じなのではないでしょうか。自分を表現する場所がそれぞれ違うだけで、もしかしたら根っここの部分にあるものは同じだったりするのかなという気がします。



「春」 1964年 カラーエッチング